

授の員に擢(えら)ばる。愈(いよいよ)奮(ふる)ひ我(われ)以為(おも)へらく、我(われ)一(ひと)國(くに)の子弟(しやくてい)人材(じんざい)たるを尽(つく)す(ことごと)く取(と)らざれば 則(すなは)ち措(お)かず。……

夫(こ)れ人材(じんざい)は國(くに)の正(ただ)脈(みやく)(しょうみやく)なり。人材(じんざい)莫(な)くば國(くに)將(まさ)に斃(たお)れん。……」

【口語訳】 そこで洋学生をつれて江戸に遊学した。学生たちに洋書を学ばせるためである。そして、浩はなお古い学問(漢学)を講じている。若山・古賀の二翁の門下で学ぼうとしている。江戸に居ること三年で、國に帰る。また、学塾を起ち上げることを進言する。すでに学問所の教授の列に抜擢されている。それでいよいよ奮起して私の思うことは、我が藩の優秀な才能を持っている人物をすべて用いることをしなければ、そのままにはしておけないのだ。…そもそも人材は國を支える根幹なのである。もし、人材がいなければ國は衰退してしまうであろう。

資料 3

待賓説

明治戊辰、余自東京將帰郷、過西京、時發機隊神機隊皆在西京、勤余從事軍旅、余爲此説而退

【大意】

明治元年、自分は東京より國へまさに帰ろうとしていた。その時、京都に立ち寄った。ちょうど、発機隊・神機隊が京都に駐屯していた。隊の者は、自分に一緒に戦争に行くようにと勧めた。しかし、自分はこの説(「待賓説」)をつくり、戦には加わらず、退いたのである。

【待賓説原文】

有大賓焉。主人禮敬備至。設帷帳。具聲樂。盃盤雜錯。肴核續紛。號召其子弟家人曰。賓事方急。曷擲汝常職。而執我之賓事。厨吏聞之。亦擲其刀而周旋於盃盤之間。行酒侑肴。既而盃盤傾焉。無繼者。肴核盡焉。無調者。主人愕然叱厨吏。使復執其刀。賓不喜而去。方今外側從事軍旅。而忘國本者。或有類此。爲待賓説

【書き下し】 「大賓(たいひん)有り、主人礼敬して至るに備ふ。帷帳(いけい)を設(しつら)へ、声樂(せいらく)を具す。盃盤(はいばん)雜錯(ざさく)す。肴核(やくかく)續紛(じよふん)(こうかくひんぶ)たり。號(な)して其(その)子弟(しやくてい)を召(よ)して家人(かじん)曰(い)く、曷(なん)ぞ汝(なん)の常職(じょうしやく)を擲(なげう)たんや。而して、我が賓事(ひんじ)を執(と)れと。厨吏(ちゆうり)これ(こ)を聞(き)き、其(その)刀(た)を擲(な)つて盃盤(はいばん)の間に周旋(しゆせん)し、酒(しゆ)を行(すす)め、肴(やく)を侑(すす)む。既(すで)にして盃盤(はいばん)傾(か)く。繼(つ)ぐ者(もの)なし。肴核(やくかく)盡(つく)く。調(た)する者(もの)無し。主人(しゆじん)愕然(おどろ)として厨吏(ちゆうり)を叱(と)し、また其(その)刀(た)を執(と)らしむ。賓(ひん)喜(よろこ)ばずして去(さ)る。方(いま)今(いま)外(あ)は則(すなは)ち軍旅(ぐんりょ)に従(したが)ふ事(こと)し、内(うち)國(くに)本(もと)を忘(わす)るる者(もの)、あるいは此(こ)れに類(たが)す。待賓説(たいひんせつ)を爲(な)す。」

ん)たり。號(な)して其(その)子弟(しやくてい)を召(よ)して家人(かじん)曰(い)く、曷(なん)ぞ汝(なん)の常職(じょうしやく)を擲(なげう)たんや。而して、我が賓事(ひんじ)を執(と)れと。厨吏(ちゆうり)これ(こ)を聞(き)き、其(その)刀(た)を擲(な)つて盃盤(はいばん)の間に周旋(しゆせん)し、酒(しゆ)を行(すす)め、肴(やく)を侑(すす)む。既(すで)にして盃盤(はいばん)傾(か)く。繼(つ)ぐ者(もの)なし。肴核(やくかく)盡(つく)く。調(た)する者(もの)無し。主人(しゆじん)愕然(おどろ)として厨吏(ちゆうり)を叱(と)し、また其(その)刀(た)を執(と)らしむ。賓(ひん)喜(よろこ)ばずして去(さ)る。方(いま)今(いま)外(あ)は則(すなは)ち軍旅(ぐんりょ)に従(したが)ふ事(こと)し、内(うち)國(くに)本(もと)を忘(わす)るる者(もの)、あるいは此(こ)れに類(たが)す。待賓説(たいひんせつ)を爲(な)す。」

【大意】 大事なお客が大勢ある。主人は丁重にもてなしをしようとお客のこられるのに準備をする。幕を張り、帳(とばり)をおろし、会場を設(しつら)え、音楽の準備をする。宴が始まり盃が入り乱れて交わされ、ご馳走があちらこちら飛び舞うようである。そこで主人は使用人たちを大声で呼び集め、どうしておまえたちのいつもやっている仕事を放り出さないのか。それを放り出してわたしの客のもてなしをしなさい。料理人は主人のこの言葉を聞いて持っている包丁を投げ出して、盃の盛んに交わされている宴席の中に入ってその場を取り持ち、酒を勧めたり、ご馳走をすすめたりする。そうしているうちにすでに酒がつきてしまった。しかし誰も追加してくるものはない。ご馳走も尽きてしまった。しかし誰も料理しない。主人はびっくりして、料理人を叱って再び包丁をもって料理するようにさせる。しかしその時はもう客たちは無然として帰っていった。

いま藩は外部に向かっては戦争に携わり、内においては國の根本(人材の育成)を忘れている。これは或いは今述べた話に類するではないか。そのように考え、この「待賓説」を記したのである。

(私には人材育成という本来の仕事があります。いまあなた方の勧めに従って軍隊に加わって戦をするということになれば、料理人が本来の仕事放って客の接待をするのと同じである。わたしはあなた方の勧めには従いません。)

資料 4

■海軍兵学校の友人に宛てた手紙

此(こ)の度(たび)のこ(こ)事(こと)、公(こう)の爲(ため)、私(わたし)の爲(ため)取(と)り計(けい)らひ下(くだ)さ

れ、萬謝仕り候。就いては、篤と思慮仕り候へども、鐵鑄の心腸挽回すべく無く存じ候に付、この上は御周旋下され、早く御放還之あり候様願ひ奉り候。

【大意】この度は浅野公のため、わたしのためにいろいろとご配慮くださりまして、厚く感謝申し上げます。このうえは、(学校との間を)おとりなしくださって、早くわたくしが国に帰りますことをお許しく下さいますようお願い申し上げます。

■海軍兵学校を辞するに当たって心境を述べた漢詩

男児有志未為灰。一諾千金不可回。願得放鳥賜閑暇。為郷鬻国育人材。

【書き下し】男児志有りて未だ灰と為らず。一諾千金にして回(めぐ)らすべからず。願わくは放鳥閑暇を賜うを得て、郷鬻、国の爲に人材を育てんと。

【口語訳】わたしは男子として人材育成という志をもっており、未だこの志を捨ててはおりません。したがって、浅野公の要請を一旦承諾しましたうえは、この約束をどうしても変えることはできません。どうかわたしにお暇をお与えください。郷里の学校、国のために立派な人材を育成したいと思ひます。

参考 解体された蔵 (日本通運の倉庫に保管してあったのを撮影したもの)



礎石 かなりの数があった



蔵の窓



楯の木の大きな梁



菊間瓦といわれるもの

特別寄稿

修 寿 会 報 告

木 村 正 勝 (高13回)

修道中学・高等学校の退職教職員の集まりである「修寿会」(会長・河野富士雄、会員82名)の第24回総会・懇親会が平成22年10月9日(土)、鯉城会館(広島県民文化センター内)で開かれ、17名の参加がありました。

開会にあたって亡くなられた恩師諸先輩に黙祷を捧げました。

引き続きの懇親会では、特に長く続いた猛暑がこれまでになく厳しいもので、どのようにしのいで、ようやくの秋の気配に生き返ったことかというような話から始まりました。出席の皆さんが、それぞれ近況を報告されるなかからは健康面のお

話、平生心がけておられることなど、やはり勤務した修道でのことが中心となりますが、退職後の生活についてはおのおの個性あるスタイルで過ごされていることが伝わってきました。短時間ではありましたが、和やかなひとときを楽しむことができました。

なお、今年度の新会員は、平山(鍋山)和子さん、渡辺宗昭さん、吉田 学さんです。

そして、恒例の校歌を斉唱し、次回(平成23年10月8日《第2土曜日》)再会を期し、修道学園のますますの発展と会員の健勝を祈念し、万歳三唱して、お開きとなりました。



木	原	仲	田	壺	藤	北	大	吉	中	街
村	本	井	中	岐	沢	川	東	崎	山	道
			(博)							
竹		晶		小		河		保		田
永				田		野		沢		(正)